



また無名化し過ぎたモダニズムへの反発から近未来的なイメージや土着的、歴史的イメージを借用することにより、建築にイメージを付与させてきたポストモダニズム建築にいたっては顕著である。

本論文は虚像を生み出す実像の多義性の観点から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」の3つの次元で捉え、「白」、「透明性」、「間」それぞれにおいて、文章構造を比較考察し多義性を明らかにするとともに、建築における実像と虚像の関係を検証するものであり、建築をとらえる新たな評価軸を示すものである。

第1章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第2章では、研究の理論として、分析を進める上で基盤となる考え方を説明し、分析対象、各章の課題の位置づけと分析方法を設定した。次に研究の流れと構成を示した。

第3章では、建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から白に関する記述を対象とし、建築分野における白という概念の多義性に着目した。そこで、白という言葉の文章中の意味を特定するため、白という言葉を取り巻く周辺語句として概念表象・種類・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで白の多義性を導出した。

第4章では、建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から透明性に関する記述を対象とし、建築分野における透明性という概念の多義性に着目した。そこで、透明性という言葉の文章中の意味を特定するため、透明性という言葉を取り巻く周辺語句として主体・度合い・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで透明性の多義性を導出した。

第5章では、建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から間に関する記述を対象とし、建築分野における間という概念の多義性に着目した。そこで、間という言葉の文章中の意味を特定するため、間の種類・間を生み出す状況・間が空間に作用する効果に着目した。間を生み出す状況は、間を生み出すふたつの事象の組合せから導出し、間が空間に作用する効果は、効果を受ける対象となる様態と効果が及ぼす作用のふたつの側面の組合せから導出した。そして、間の種類・間を生み出す状況・空間効果のそれぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで間の多義性を導出した。

第6章では、3章から5章までで導出した多義性から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」という3つの次元の観点からその総体を把握し、建築における実像と虚像の関係に対する論考をした。

第7章では、各章の流れと結論を総括し、実像と虚像の関係を建築史、日本建築、現代建築、社会のそれぞれの中に位置づけることにより広く論考を展開するとともに、今後の課題と展望を述べた。



## 論文審査結果の要旨

本論文は、現代日本の建築家による言説を通して、建築物の言語描写における多義性の側面から実像と虚像の関係を論じたものである。従来、建築をとらえる観点として、物の性質や空間スケール、空間構成、建築によってつくりだされる光、風、温度などの環境現象などに重きを置くものが多かったが、同じ物、空間、現象でも人の認識、体験、慣習、文化、社会背景などの違いにより、つくりだされる像（印象）、そこから受け取る意味内容は異なる。実体としての建築にとどまらず、その実像がつくりだす虚像まで含めた水準で建築を検討することは重要であると考えられる。建築家の創作行為の一部としての言説活動に着目し、建築家が物、空間、現象をどのようにとらえ、そこにどのような性質、効果、ストーリー（意味）を創出しようとしてきたかを、多数の建築家の言語描写を相互に比較検討することにより、実像と虚像の関係を明らかにすることを目的とする。

本論文は「建築物の言語描写における多義性からみる実像と虚像」と題し、七章により構成される。

第一章では、本研究の目的と意義を示した。また、関連する既往研究を整理した。

第二章では、研究の理論として、分析を進める上で基盤となる考え方を説明する。まず、分析対象の位置づけを行い、各章の課題の位置づけと分析方法を設定した。次に研究の流れと構成を示した。

第三章では、建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から白に関する記述を対象とし、建築分野における白という概念の多義性に着目した。そこで、白という言葉の文章中の意味を特定するため、白という言葉を取り巻く周辺語句として概念表象・種類・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで白の多義性を導出した。

第四章では、第三章と同じく建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から透明性に関する記述を対象とし、建築分野における透明性という概念の多義性に着目した。そこで、透明性という言葉の文章中の意味を特定するため、透明性という言葉を取り巻く周辺語句として主体・度合い・性質・効果を定義し、それぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで透明性の多義性を導出した。

第五章では、前章までと同じく建築家が自身の作品において述べた言語描写の中から間に関する記述を対象とし、建築分野における間という概念の多義性に着目した。そこで、間という言葉の文章中の意味を特定するため、間の種類・間を生み出す状況・間が空間に作用する効果に着目した。間を生み出す状況は、間を生み出すふたつの事象の組合せから導出し、間が空間に作用する効果は、効果を受ける対象となる様態と効果が及ぼす作用のふたつの側面の組合せから導出した。そして、間の種類・間を生み出す状況・空間効果のそれぞれの相関をコレスポンド分析を用いて模式化することで傾向を把握し、傾向を重ね合わせることで間の多義性を導出した。

第六章では、三章から五章までで導出した多義性から、表層の次元として「白」、ものの次元として「透明性」、空間の次元として「間」という3つの次元の観点からその総体を把握し、建築における実像と虚像の関係に対する論考をした。

第七章では、各章の流れと結論を総括し、実像と虚像の関係を建築史、日本建築、現代建築、社会のそれぞれの中に位置づけることにより広く論考を展開するとともに、今後の課題と展望を述べた。

以上の成果は、3つの日本建築学会計画系論文集（審査有り論文）へ掲載されることとなり、建築計画や建築設計の分野において、貴重な研究成果であり、次なる展開も期待されている。

以上、本論文は、博士論文として相応しいと判断する。